

日本語学習者における複合動詞の誤用分析

—作文データベースを用いて—

陳 曦

1. はじめに

本研究は、学習者コーパスを用いた日本語複合動詞の誤用分析である。本稿では、「言い出す、思い込む」のような「動詞の連用形＋動詞」の形を複合動詞とし、前の動詞を「前項動詞」、後ろの動詞を「後項動詞」と呼ぶ。

2000年以降、複合動詞習得の重要性に関する認識が高まり、松田、陳、何をはじめとする研究者が複合動詞の習得研究に力を入れてきた(松田 2000、2002a、2002b、2004; 松田・白石 2006; 陳 2004、2006、2007a; 白 2005、2007; 何 2007、2009a、2009b、2010)。特に、2009年度の中国国家プロジェクトである『日本語複合動詞教学方略研究』(研究代表者: 張威)をきっかけとして、日本語の複合動詞習得・教育を研究するためのネットワークが徐々に形成され、研究成果が蓄積されている。¹

このように盛んになりつつある複合動詞の研究であるが、その教育や習得支援の方向性を探るために、まず学習者の実際の使用状況の調査を初めとする基礎研究が必要になる。筆者は2007年以来、学習者コーパスを用い、学習者の使用実態調査を中心とする複合動詞習得研究を進め、一連の成果を挙げてきた(2007b、2008a、2008b、2010、2011)。そのうちの陳(2008a)は、学習者による作文データベースを用いて、学習者の複合動詞使用状況を母語話者との比較を通して量的に明らかにした。本研究では、陳(2008a)の研究を進め、学習者の作文に現れた複合動詞の用例に着目し、正用・誤用の分布、誤用の特徴とパターンを分析する。

2. 今までの研究経緯と本研究の課題

¹ 2009年『北研学刊』(通巻第5号)の『特集号・日本語の複合動詞』の刊行と、2011年『日本語学習と研究』(第3号、第5号、第6号)における複合動詞に関する計12編の論文の掲載は、複合動詞習得・教育研究の新しい進展を裏付けている。

陳(2008a)では、作文データベース(データベースの内容については 3.1 に詳述)を利用し、学習者による作文と母語話者による作文を、複合動詞の使用頻度と複合動詞使用上位 15 項目、及びそれらの、後項動詞別、前項動詞別、学習年数別、母語別など、四つの視点からの比較を通して、作文における学習者の複合動詞の使用状況を量的に調査した。

陳(2008a)で明らかにしたことは、第一に、全体として学習者は複合動詞の使用頻度が母語話者の 3 分の 1 程度と少なく、また、学習者の出身国ごとに複合動詞の使用率に差はあるが、出身国別で使用傾向は特段の差は見られなかった。なお、誤用は「さしあげる」など、敬語表現としての複合動詞に多かった。第二に、学習者と母語話者の後項動詞別上位 15 項目を比較した結果、上位 15 項目中 10 項目が共通しており、両者とも同じ後項動詞を使用する傾向が見られる。誤用は、「～始める」、「～始まる」など、複合動詞の自動詞・他動詞の使い分けについてのものが多く見られた。第三に、前項動詞別上位 15 項目中では 6 項目が共通し、学習者と母語話者の共通性は後項動詞ほどは顕著でなかった。最後に、複合動詞の使用頻度に学習年数による差は見られなかった。

以上の作文における複合動詞使用状況の量的調査の結果を受けて、本稿では、複合動詞の例文を用いて、正用と誤用はどのような比率か、どのような誤用のパターンがよく見られるか、などの問題について更に考察を深めたい。

3. 研究方法

3.1 データ概要

本研究は、国立国語研究所が作成した『日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース』(作文対訳 DB)を利用する。

作文対訳 DB には、中国、インド、カンボジア、韓国、マレーシア、モンゴル、シンガポール、タイ、ベトナム、日本の十カ国から約 1,100 名分の作文データが収集されており、作文の課題は「1、あなたの国の行事について」と「2、たばこについてのあなたの意見」の二種類である。²データの総文字数は 693,224 である(そのうち学習者による作文の総文字数は 648,865、母語話者による総文字数は 44,359)。本研究では、学習者による作文のみを分析対象にする。

3.2 分析手法

3.2.1 複合動詞例文の抽出

複合動詞例文を抽出する際に、Perl³、テキストエディタや正規表現を利用した。具体的な抽出手順は滝沢(2004)を参考にして行った。

² カンボジアにおいては、喫煙者が極めて少ないという事情から、「外国からの援助について」という課題 3 を用意している。

³ Perl(パール)とは、ラリー・ウォールによって開発されたプログラミング言語である。詳細は <http://www.perl.org/> を参照されたい。

最初に、作文対訳 DB の作文データを学習者の出身国別に統合した。次に学習者の作文を学習年数により、「1 年未満」、「1～2 年」、「2～3 年」、「3 年以上」と四つのグループに分け、学習年数別に統合した。さらに、作文のテーマにより、「たばこ」と「行事」の二つのグループに分けた。最後に母語別、学習年数別、作文テーマ別に、それぞれのグループの総文字数を算出した。

次に、「茶筌⁴」で作文対訳 DB に対し品詞情報を付与した。タグ付けされたデータについてグループ(母語別、学習年数別、テーマ別)ごとに複合動詞を抽出し、元のデータと照らし合わせ、複合動詞の一覧表を作成した。なお、「茶筌」によって行った誤用データの形態素解析は、その信憑性について疑わしい点があるため、最終的に例文の抽出作業は全て手作業でチェックを加えた。

最後に複合動詞の一覧表に基づき、複合動詞の例文(685 文)が抽出できた。

3.2.2 正用・誤用の判定

はじめに、抽出した複合動詞例文(計 685 文)を「正用」、「不自然」、「誤用」の 3 つに分けた。日本語母語話者 15 名(そのうち、日本語教育関係者 8 名)に複合動詞が文脈の中で意味や使用法、もしくは慣習的に受容できるかどうかという観点に基づき受容判断をしてもらった。不自然、または誤用であると判断した場合に、判断理由と修正案を記してもらった。母語話者全員が正用としたもの、及び母語話者が 1 名だけ誤用であると判断し、残りの全員が正用と判断している場合は正用とした。また、2～5 名が誤用であると判断した場合は不自然な用法であるとみなした。不自然な用例とは、完全に誤用であるとは言い切れないものの、母語話者の用法と微妙に違っていたり、違和感があったりする文である。最後に、6 名以上の母語話者が誤用であると判断した文は、誤用とした。

3.3 本研究での複合動詞の分類

本研究では、1) 第二言語としての複合動詞習得の先行研究である何(2007、2009a、2009b、2010)と、母語としての複合動詞習得の先行研究である寺田(2001:21)を参考にすること、2) 影山(1993:117)、寺村(1984:167)などによる言語学・日本語学の知見を取り入れること、3) 日本語教育での複合動詞の扱われ方を参考にすること(主に『新版日本語教育事典』(2005:126))、4) 文法的、意味の上での性質が異なるときは、学習者の習得上、同じカテゴリーとしてまとめて教えるべきではないこと、5) 必要最小限の分類であり、学習者に混乱を招かないこと、という 5 点を主軸として複合動詞を表 1 のように分類した。この分類は、データを分析する際の枠組みを示すものである。

⁴ 「茶筌」は日本語形態素解析ツールの一種である。詳細は <http://chasen.naist.jp/hiki/ChaSen/> を参照されたい。

表 1 本論文での複合動詞の分類

統語的複合動詞 ⁵		語彙的複合動詞 ⁶		
タイプ① ⁷	タイプ② ⁸	タイプ③	タイプ④	タイプ⑤
V1+アスペクトを 表さない V2	V1+アスペクトを 表す V2	自立 V1+自立 V2	自立 V1+付属 V2 もし くは付属 V1+自立 V2	付属 V1+付属 V2
例) 殴り合う、 書き直す	例) 食べ始める、 降り出す	例) 流れ着く、 泣き叫ぶ	例) 逃げこむ、 引きかえす	例) 落ち着く、 繰り返す

注) V1: 前項動詞。V2: 後項動詞。V: 動詞。

「自立 V」: 単独で使われるときの意味、文法的特徴が、複合体の中でも保持されているもの。

「付属 V」: 単独の場合とは全く、あるいはかなり違っているもの(詳細は寺村 1984:167 を参照)。

4. 結果と考察

4.1 正用・誤用の分布

4.1.1 総合的使用状況

作文対訳 DB から抽出した複合動詞の例文数は合計 685 文となった。これらの例文を 3.2.2 の方法で正誤判断をしてもらい、例文を正用、不自然と誤用に分けた。それぞれの例文数と全例文数に占める率を表 2 に示す。「不自然」と判定された 139 文と「誤用」と判定された 232 文を合わせると、全例文の半分強を占めていることが分かる。この結果より、複合動詞は学習者にとって習得困難な学習項目の一つであることが推測できる。現在の日本語教育においては、複合動詞を一つの学習項目として扱うことの教育上の意義はあまり検討されず、学習者に提示されることが少なかった。今後、計画的・効果的な複合動詞教育、指導法に関する研究が希求されると考える。

表 2 学習者例文の正用・誤用分析の結果

	正用 (全例文数 685 に対する割合)	不自然 (全例文数 685 に対する割合)	誤用 (全例文数 685 に対する割合)
延べ複合動詞例文数 685	314 文 (45.9%)	139 文 (20.3%)	232 文 (33.9%)

5 統語的複合動詞: 補文関係を取る複合動詞で、「話し始める」が「話すことを始める」と言い換えられるように前項が後項の目的語(もしくは主語)になるものである(例: 話し終わる、食べ始める、歩き過ぎる)。(詳細は影山 1993:117 を参照)

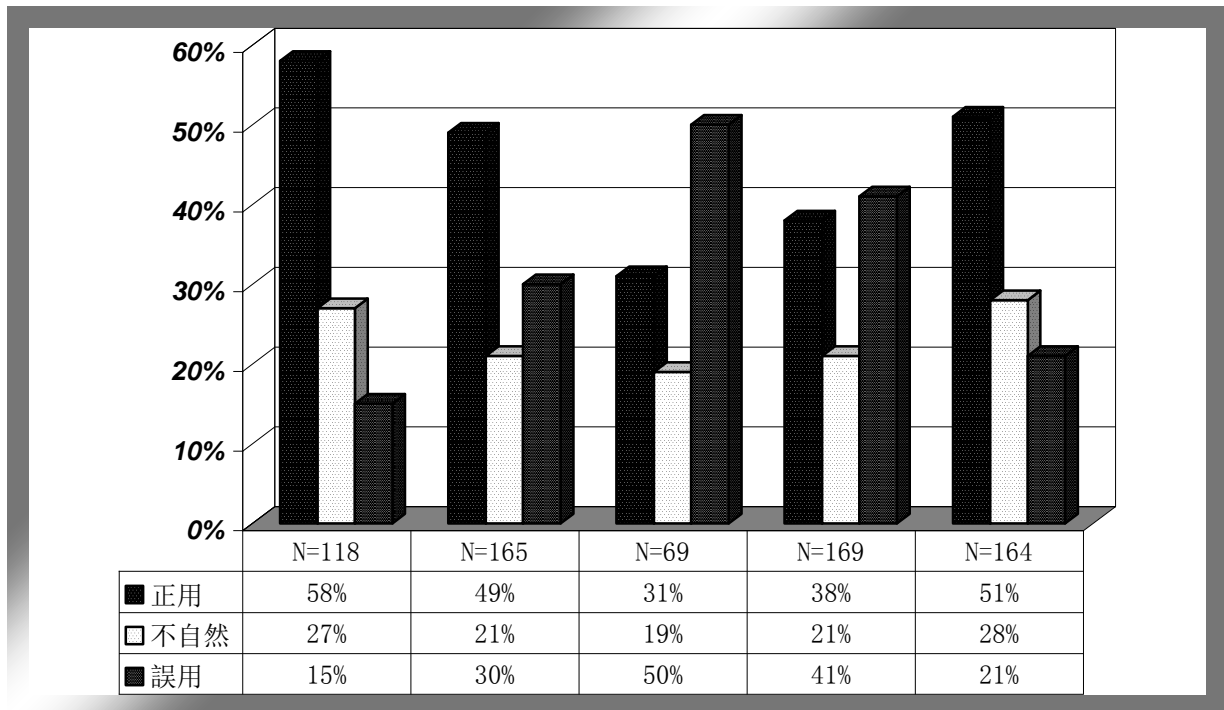
6 語彙的複合動詞: 具体的に意味から見ると語彙的な結合制限があり、補文関係をとらない複合動詞である(例: 飛び上がる、飲み歩く)。(詳細は影山 1993:117 を参照)

7 タイプ①には、「過剰」を表す「過ぎる」(例: 見すぎる→見ることがすぎる)や「可能」を表す「うる」(例: 見うる→見る可能性がある)などの後項動詞がある。

8 タイプ②には、大別して2類がある。一つは、時間的な局面だけを表す「しはじめる」、「しつづける」、「し終わる」などであり、もう一つは、「しつくす」、「しきる」、「し通す」などの内容的な完遂を表すものである。(詳細は『新版日本語教育事典』:126 を参照)

表 1 に示す 5 種類の複合動詞使用数とそれぞれのタイプの正用率・不自然率・誤用率を図 1 に示す。なお、グラフの横軸は複合動詞分類のタイプ①～⑤と対応しており、縦軸(左側)は各タイプの正用・不自然・誤用の割合を示している。

図 1 複合動詞のタイプ別の使用状況



統語的複合動詞の小分類について考えることから入る。タイプ①(「V1+アスペクトを表さないV2」の統語的複合動詞類)では、使用数が119文であり、正用率は6割弱程度である。また、誤用の多くは形式上のものであるため、複合動詞としてはさほど困難な部類ではないと思われる。

タイプ②(「V1+アスペクトを表すV2」の統語的複合動詞類)は使用数が166文で多いが、正用率(49%)はあまり高くない。誤用分析の項で後述するが、タイプ②での誤用は後項動詞における自動詞と他動詞の使い分けによるものが顕著だった。

次に語彙的複合動詞の小分類について考察する。全体的な傾向として、タイプ③(「自立V1+自立V2」の語彙的複合動詞類)は使用数が最も少なく、誤用率(50%)が最も高い。学習者は自身の習得内容を過剰般化してしまう傾向があるため、母語話者が使わないような「自立V1+自立V2」を複合動詞として使用したのではないかと推測される。

タイプ④(「自立V1+付属V2」もしくは「付属V1+自立V2」の語彙的複合動詞類)は使用数が多いわりには正用率が高くない。陳(2007a)の指摘のあるように、タイプ④のなかでは、付属Vがつくことによって自立Vの意味範囲が単一動詞(本稿では非複合動詞をさす、

以下同じ)として用いる場合の意味範囲より縮小或いは拡大するケースの習得が難しいと考えられる。

タイプ⑤(「付属 V1+付属 V2」の語彙的複合動詞類)は使用数、正用率ともに高い。タイプ⑤の類は一語化した複合動詞で、学習してしまえば元の動詞の意味にとらわれることなく、普通の新出単語として覚えられるため、習得しやすいと推測される。

次に、複合動詞のタイプ別の使用数及び正用率を総合的に見てみる。使用率(多→少)は、④→⑤→②→①→③であり、正用率(高→低)は、①→⑤→②→④→③である。タイプ③の使用率が最も低く、正用率も最も低い。このことから、タイプ③は学習者にとって一番習得困難な項目であることが推測できる。一方、タイプ⑤の使用率が高く、正用率も高い。ゆえに、タイプ⑤は最も習得しやすい項目であると考えられる。

以下、各タイプの主な誤用パターンについて、例文を出しながらまとめる。

1) タイプ①における主な誤用

タイプ①(「V1+アスペクトを表さない V2」の統語的複合動詞類)の正用率は 6 割弱である。主な誤用は、単一動詞のみで十分であるのに、ほかの動詞と結合して不自然になっているケースである。

- (1) タバコを吸っている人と話し合っている(→話している)人は、自分は吸っていないにもかかわらず、吸っている人の喫煙量の 3 分の 1 ぐらいの量を吸い込むことになるそうだ。(韓国入学者、学習年数 2~3 年)

2) タイプ②における主な誤用

タイプ②(「V1+アスペクトを表す V2」の統語的複合動詞類)は、使用数が多いが、正用率は低い。4.2.2 で詳述するように、このタイプでは、後項動詞の自動詞と他動詞の間の誤用が多く見られた。例えば(2)のように、「~あげる」、「~始める」、「~続ける」を「~あがる」、「~始まる」、「~続く」とするなどである。

- (2) しばらくすると老人はみあがって(→見上げて)木を見るとさるたちはみんなぼうしをかぶっていました。(インド入学者、学習年数 2~3 年)

3) タイプ③における主な誤用

タイプ③(「自立 V1+自立 V2」の語彙的複合動詞類)は使用数が最も少なく、誤用率は最も高い。「動詞+動詞」が全て複合動詞として受容できるわけではない。しかし、結合条件が学習者に習得されていない場合、学習者は例(3)の「持ち離れる」のような、母語話者が使わない「自立 V1+自立 V2」を複合動詞として使用する。

- (3) 春節の日掃除することは禁止です。掃除すると、運も持ち離れる(→離れる)と言われています。
(中国人学習者、学習年数 2～3 年)

4) タイプ④における主な誤用

タイプ④(「自立 V1+付属 V2」もしくは「付属 V1+自立 V2」の語彙的複合動詞類)は使用数が多いわりに正用率は高くなく、学習が困難と思われる。結合によって単一動詞(自立語)の意味が変化するのを正しく捉え切れていないようである。陳(2007a:98)で指摘したように、タイプ④のうち、付属 V が自立 V の意味範囲を単一動詞として用いる場合の意味範囲よりも縮小或いは拡大する場合において習得が難しいと思われる。

例(4)では、「分ける」は単独で、別のものとして分類するという意味を持つ。前項動詞「ふる」が結合すると役割などを割り当てるという意味に縮小する。

- (4) タイの結婚は主に恋愛結婚です。結婚婚約式と結婚式に振り分けられます(→分けられます)。
(タイ人学習者、学習年数 1～2 年)

5) タイプ⑤における主な誤用

タイプ⑤(「付属 V1+付属 V2」の語彙的複合動詞類)は使用数、正用率ともに高い。タイプ⑤の類は「出かける」、「付き合う」など、一語化した複合動詞なので習得しやすいと考えられるが、例(5)のような、使う場面や意味を取り違えている誤用例が見受けられた。

例(5)において、「でかける」を「会いに行く」という意味で用いているが、「でかける」は「どこか外に用事で行くこと」と母語話者はコメントしている。もしも「兄弟と両親のところへ出かける」なら正用と認められる。

- (5) でもかれらはひまなときがありますからいなかへかえりました。あそこでともだちときょうたいとりょうしんにでかけます(→会いに行きます)。
(カンボジア人学習者、学習年数 1～2 年)

4.2 誤用分析

4.1 では、学習者の複合動詞の使用例の正用と誤用の分布と複合動詞のタイプ別の誤用パターンをまとめた。本節では、母語話者のコメントから学習者による主な複合動詞の誤用パターンを考察する。

本論文では誤用パターンのうち、①単一動詞のみの使用で十分である、②後項動詞の自他動詞が正しく使用できていない、③活用・ヴォイスに誤りがある、の 3 点について取り上げ、分析する。①～③でそれぞれ誤用と判断した母語話者の数とその割合を表 3 に示す。

なお、例文中の誤用は 1 種類とは限らず、複合的な誤用も存在するため、誤用の分類において、複数回答を認めている。①と③は誤用の例文のうち、2 割程度をも占めている。以下に、①～③の誤用について、母語話者によるコメントを引用し、例文を挙げて分析と考察を行う。

表 3 本論文で取り上げる誤用のパターン

	誤用	不自然	計	誤用+不自然に占める割合
①単一動詞のみの使用で十分	34	36	70	19.9%
②後項動詞の自他の誤用	22	1	23	6.6%
③活用・ヴォイスの誤用	49	22	71	20.2%

注)「誤用+不自然に占める割合」には、複数回答あり。

4.2.1 単一動詞のみで十分である誤用

学習者の作文には、単純動詞のみの使用が正しい箇所に、誤って複合動詞を使用してしまう例が多く見られた。複合動詞は単一動詞で用いられる場合と違って、方向性や結果などの意味が追加され、元の動詞とは異なるニュアンスを持つことになる。しかし学習者が、その働きがあることを十分に理解せずに、複合動詞を「強調」として捉えている場合、違和感がある文となり、単一動詞のみで用いた方が自然に感じるケースもある。特に、明確な意味づけをするアスペクトを表すものや、方向を表すものではなく、細かなニュアンスを与えるような複合動詞は、単一動詞との差に注意しながら習得することが必要となる。今回の調査での母語話者の回答に「複合動詞にすると違和感がある」とのコメントが多数あった。(6)、(7)はこのような誤用の例である。

- (6) 四月にはタイプァン人は古い行事を行います。これはキシャンヘーナークという行事です。この行事は出家しに行くために男の人が象に乗って家を出かける(→出る)という意味でした。(タイ人学習者、学習年数 1～2 年)

「出かける」は、ある目的で外出するという意味になるため、「出る」とはっきり区別される。つまり、例(6)のように「家を」という場所を伴うなら「出る」が適切である。

- (7) タバコを吸っている人と話し合っている(→話している)人は、自分は吸っていないにもかかわらず、吸っている人の喫煙量の 3 分の 1 ぐらいの量を吸い込むことになるそうだ。(例 1 再掲)(韓国人学習者、学習年数 2～3 年)

「話し合う」は何か問題・課題を解決するために複数の人がある議題についての意見を取り交わすことであり、例(7)の場合では、「話す」のみで使用する、あるいは「語り合う」などを

用いるのが自然である。

4.2.2 後項動詞の自他動詞の誤用

アスペクトを表す統語的複合動詞(タイプ②)は、意味的透明性が高く、それぞれの動詞の意味が分かれば、全体としての意味を導き出すことができるため、日本語学習者にとっては、その理解と使用が比較的容易と言われる(谷内・小森 2009:114)。また、文法項目として指導を受ける機会があるため、誤用が少ないと思われるが、今回の調査では、このような予想とは異なる結果が現れた。

例(8)、(9)の「吸い始まる」、「笑いはじまる」に見られるように、後項動詞の自他動詞の誤用が目立った。動詞の自動詞と他動詞は古くから研究されている項目である。学習者が自他動詞の区別がまだ出来ていない段階で複合動詞を使おうとすると、当然ながら複合動詞になるときに自他が間違った状態で結合してしまう。後項動詞の自他の誤用は日本語母語話者には非常に違和感があるようで、「不自然」の割合が少なく、ほとんどの母語話者に「誤用」と判断されるという特徴がある。今回の調査ではこのような「～始まる」の誤用が最も多かった。

- (8) 人々にある所にもきつえん者はタバコを吸っています。子供たちもせんでんや年上の吸っているの人々を見てたばこを吸い始まります(→吸い始めます)。
(タイ人学習者、学習年数 2～3 年)

- (9) ゴールは自分の脚の骨を折るのふりをした。彼の母がいなかったので村の女性たちが彼をたいへん気の毒に思った。一人の女の人はくすりなどを持って来たとゴールはふたたび笑いはじまりました(→笑い始めました)。
(インド人学習者、学習年数 1～2 年)

4.2.3 活用・ヴォイスの誤用

表 3 から分かるように、母語話者によって「誤用」と判断された例文の中で、特に多いのが活用・ヴォイスに関するものである。例文(10)において、「売り切れました」が正用である。(11)は「着替えさせてあげた」、(12)は「落ち着かせてくれる」のように使役の形を取るのがよい。

- (10) 第1回目のときは座席の予約があまり多くなかったがだんだん信用を得て、第4回目のときはだいぶぶん売り切れされました(→売り切れました)。
(韓国人学習者、学習年数 2～3 年)

- (11) 先ず、私とおばと両親は祖母の体を洗ってあげた。そして、私たちは祖母が一番好きな洋服に祖母に着替えてあげた(→着替えさせてあげた)。
(タイ人学習者、学習年数 1～2 年)
- (12) また緊張したり、腹が立った時落ち着いてくれる(→落ち着かせてくれる)鎮静剤の役割をするそうです。(韓国人学習者、学習年数 1～2 年)

今回の調査では、動詞の受身と使役の誤用がよく見られた。すなわち学習者は動詞の活用や形式の習得ができていない段階で複合動詞を学習しても、単純動詞としての誤用を犯す可能性が高い。複合動詞の教授時期はよく検討する必要がある。

5. 終わりに

本研究は、日本語学習者の作文データベースを用いて、複合動詞の誤用分析を行った。その結果、685 の複合動詞使用例のうち、不自然な例文と誤用の例文を合わせると半数以上となり、学習者が複合動詞を正しく理解できていないことが浮き彫りとなった。学習者の誤用例を調べてみると、主に、単一動詞のみの使用で十分なところでの複合動詞の使用、後項動詞の自他動詞の誤用、活用・ヴォイスなどの誤用などが目立った。これらの誤用から、複合動詞指導する際、ベースとなる単一動詞(自動詞と他動詞を含む)の習得をきちんと行うこと、複合動詞の結合条件について明示すること、複合動詞と単一動詞との違いを明確に説明し、具体的な例文を多く挙げながら説明することなどが肝要であることが明らかになった。

[参考文献]

- 滝沢直宏(2004)「日本語電子化テキストからのコロケーションの抽出」『日本語学習辞典編纂に向けた電子化コーパス使用によるコロケーション研究』平成13年～15年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)報告論文集(研究代表者:大曾美恵子) pp.27-40
- 陳曦.2004.「中国人学習者における複合動詞の習得に関する一考察—『～あう』と『～こむ』の理解に基づいて—」『ことばの科学』17: 59-79.
- 陳曦.2006.「中国人学習者における複合動詞の習得に関する一考察—学習者の作文産出に基づいて—」『ククロス:国際コミュニケーション論集』3: 1-15.
- 陳曦.2007a.「日本語複合動詞の習得状況と指導への問題提起—中国西安外国語大学における『～あう』『～こむ』の調査を中心に—」『国際開発研究フォーラム』35: 93-102.
- 陳曦. 2007b.「学習者と母語話者における日本語複合動詞使用状況の比較—コーパスによるアプローチ—」(特集 コーパス日本語学の射程)『日本語科学』22: 79-99.

- 陳曦.2008a.「日本語学習者と母語話者における日本語複合動詞使用状況の比較—作文データベースを用いて—」『小出記念日本語教育研究会論文集』16: 83-96.
- 陳曦.2008b.《关于日语复合动词习得的研究—以学习者语料库的使用时态调查为中心—》中国社会科学出版社.
- 陳曦.2010.「第二言語としての二種類の複合動詞の習得—コーパスによる学習者の使用実態調査をもとに—」『ことばの科学』23: 19-35.
- 陳曦.2011.「日本語教科書における複合動詞の扱われ方に関する—考察—コーパスによる使用実態調査との比較を通して—」『ことばの科学』24: 119-131.
- 白以然.2005.「複合動詞『～出す』・『～始める』の習得—韓国語を母語とする学習者の意識を中心に—」『人間文化論叢』8: 307-315.
- 白以然. 2007. 「韓国語母語話者の複合動詞『～出す』の習得—日本語母語話者と意味領域の比較を中心に—」『世界の日本語教育』17: 79-91.
- 何志明.2007.「香港における上級日本語学習者の複合動詞の習得及び使用実態調査」『日本語教育学会 2007 年度春季大会予稿集』: 47-52.
- 何志明.2009a.「香港の日本語学習者の複合動詞習得の現状」『北研学刊』(特集号・日本語の複合動詞)通巻5:105-115.
- 何志明.2009b.「作文教育における複合動詞の指導」『日語動詞及相关研究』(張威・山岡政紀編): 247-260.
- 何志明.2010.『現代日本語における複合動詞の組み合わせ—日本語教育の観点から—』笠間書院.
- 姫野昌子.1999.『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房.
- 影山太郎.1993.『文法と語形成』ひつじ書房.
- 松田文子.2000.「複合動詞の意味理解方略の実態と習得困難点」『言語文化と日本語教育』20: 52-65.
- 松田文子.2002a.「複合動詞研究の概観とその展望—日本語教育の視点からの考察—」『言語文化と日本語教育5月特集号 第二言語習得・教育の研究最前線—あすの日本語教育への道しるべ』: 170-184.
- 松田文子.2002b.「日本語学習者による『～こむ』の習得」『世界の日本語教育』12: 43-62.
- 松田文子.2004.『日本語複合動詞の習得研究—認知意味論による意味分析を通じて—』ひつじ書房.
- 松田文子・白石知代.2006.「コア図式を用いた複合動詞習得支援のための基礎研究—『とり～』を事例として—」『世界の日本語教育』16: 35-51.
- 谷内美智子・小森和子.2009.「第二言語の未知語の意味推測における文脈の効果—語彙的複合動詞を対象に—」『日本語教育』142: 113-122.
- 社団法人・日本語教育学会.2005.『新版日本語教育事典』大修館書店.

陳 曦

寺田裕子.2001.「日本語の二類の複合動詞の習得」『日本語教育』109: 20-29.

寺村秀夫.1984.『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.

[付記]

本稿は 2010 年陝西省教育庁科学研究項目(研究代表者:呉少華;課題番号:2010JK243)、2011 年度中国教育部人文社会科学研究一般項目(研究代表者:陳曦;課題番号:11YJC740014)による研究成果の一部である。